子どもの成長・発達

子どもの発達段階ごとの特徴や発達課題について基礎的な知識の理解を目的とします。また、他者とのコミュニケーションや社会性に係る子どもの発達の傾向について理解し、子どもとのコミュニケーション又は子ども同士のコミュニケーションの支援に役立てること目的とします。

目次

1.子どもの発達（ヒトの発達の段階） 2

2.各発達段階での発達上の特性＆発達課題 3

3.乳児期（０～１歳半）の発達段階の目安 4

4.幼児期（１歳半~6歳）の発達段階の目安 5

5.児童期（6歳~12歳）の発達段階の目安 7

6.青年期（12歳~20歳）の発達段階の目安 9

7.子どもの仲間関係 10

8.子どもの性意識と性の受容 12

9.道徳性と向社会的行動 13

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

子どもの発達

Point！ ・ 子どもの発達段階ごとの特徴や発達課題の把握は、その子どもとの関わり方やケア・指導方法の検討の参考になり得ます

ひとの発達の段階

- ひとりひとりの子どもについて、性別はもちろん、性格や嗜好、得意なこと不得意なことは当然異なるものですが、成長に伴うその心身の変化については人間一般にある程度共通して見られる変化があります。
- こうした生涯の発達の区分については様々な論がありますが、一例として次のように区分されます。

胎生期	・受精後の約38週であり、卵体期（0～2週）、胎芽期（3～8週）、胎児期（9週～出生まで）に分けられる。卵体期に受精卵が着床し、胎芽期に各器官が作られ、胎児期に身体が肥大化していく。
乳児期	・誕生から1歳半ごろまでをさす。養育者の全面的な世話を必要とし、そのやりとりの中で基本的信頼を獲得する。この時期の終わりに、人に特有の行動である言語（発語）と二足歩行が見られるようになる。
幼児期	・1歳半ごろから6歳ごろまでをさす。養育者による世話や遊びを通して、言語や思考、情緒、社会性、運動能力が発達する。この時期の終わりには、基本的生活習慣が確立し、大人の手助けがなくても身辺自立が可能になる。
児童期	・6歳ごろから12歳ごろまでをさす。義務教育が始まり、主に学校での活動（勉強やスポーツ、仲間関係）を通して社会化される一方、個性化も進む。客観的・論理的思考が可能になるが、個人差も大きく、学習面でのつまずきを経験する子どももいる。
青年期	・12歳ごろから20歳ごろ（30歳ごろまでとする説もある）までをさす。第二次性徴により性的な成熟が進む時期を特に思春期と呼ぶ。学校や職場におけるさまざまな体験を通して、自分にふさわしい職業や役割を模索し、社会に出る準備をする。
成人初期	・20代から30代半ばぐらいまでをさす。社会人となり、就職や結婚、出産や育児、転職といったライフイベントを経験し、自分なりのライフスタイルを確立する。
成人期	・30代半ばから60代初めくらいまでをさす。生活が比較的安定する一方、仕事や家庭での責任が増し、次世代を育成することが課題になる。体力や気力の衰え、職業上の限界なども体験し、それまでのライフスタイルを軌道修正を図っていく。
老年期	・職業から引退し、時間的な余裕ができる一方、老いや病気、親しい人との別れに直面する機会が増える。ただし、喪失ばかりでなく獲得的変化（知能や情緒面）も見られる。自分の人生を振り返り、意味づけをしながら、死に向けて準備をする時期。

（出所）向田久美子：新訂発達心理学概論.一般財団法人放送大学教育振興会.2018,pp11-12 より引用

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

各発達段階での発達上の特性＆発達課題

- 子どもの成長過程においては、多くの子どもに共通にみられる各発達段階ごとの特性があります。
- また、子どもの成長過程においては、それぞれの段階で達成しておくと、その後の発達が順調に進むけれども、その達成につまずくとその後の発達に支障をきたす可能性のある課題（発達課題）が存在します。
- 子どもの心身の健やかな成長と人格の形成を考える上では、発達上の特性と発達課題を念頭に適切な支援・指導を行うことが重要とされています。

発達段階	発達上の特性	発達課題
乳児期 （0~1歳半）	• 対象の永続性（触ることができず、視界に入らなくなったものでも存在し続けているという概念）の理解に達する • 親しい人とそうでない人を区別するようになる • 知らない対象について周囲の親しい成人がどういう表情で接しているかを見て、その対象に近づいていいのか、避けた方がいいのか判断するようになる • 自分の関心のあるものや欲求を示すようになる	**【信頼感vs不信感】** • アタッチメント（愛着）の形成 • 人に対する基本的信頼感の形成
幼児期 （1歳半~6歳）	• 語彙力が増え、3歳ごろには概ね十分な発話力を持ち、自分の意思を言葉で表現できるようになる • 想像力が発達し、ごっこ遊びが見られるようになる • 遊びを中心とした友達とのかかわりあいを通じて、道徳性や社会性の原型といえるものを獲得していく • 身体的技能の発達とともに食事、衣服の着脱など身の回りのことを自分でしようとするようになる • 食事、睡眠等の生活リズムが定着する	**【自立vs恥・疑惑】** **【自主性vs罪の意識】** • 自己主張・自己抑制機能・欲求不満耐性の獲得 • 十分な自己の発揮と他者の受容（他社の感情や意図の理解）による自尊感情・自己効力感の獲得 • 身辺自立への訓練・学習 • 善悪の区別についての学習と良心の芽生え
児童期 （6~12歳）	• 物事をある程度抽象化して認識することが可能となる • 人間関係や、集団の中の地位・役割の関係を認識するようになる • メタ認知（自己の認知活動に対する認知や知識のこと。）能力が発達する • それぞれの性別に沿って社会的に期待されている性役割を意識し、取り込むようになる • 集団とのかかわりにおいては、徐々に集団の規則や遊びのきまりの意義を理解して、集団目標の達成に主体的に関わったり、共同作業を行ったり、自分たちできまりを作り守ろうとしたりすることもできるようなる • 排他的な遊び仲間同士で活動するギャングエイジを迎え、閉鎖的な仲間集団ができる。集団間の争いや所属する集団への付和雷同的な行動も見られるようになる	**【勤勉vs劣等感】** • 集団生活への適応 • 善悪判断に関する基本的な尺度・枠組みの確立 • 抽象的な思考様式への適応、他者の視点への理解力の発達（9歳の壁） • 活動能力の広がりに応じた現実世界への好奇心 • 対人関係能力、社会的知識・技能の向上 • 良心・道徳性・価値判断の尺度の高次化・強化
青年期 （12~20歳）	• 内省的傾向が顕著になり自意識が一層強まる • 自分の生き方を模索するようになる • 親や教師の存在は相対的に小さくなり、特定の仲間集団の中に安息を見出すようになる • 反抗期を迎える • 性意識が高まり、異性への興味・関心が高まる • 知的にも情緒的にも人間や社会に対する認識が進化する可能性があり、法やきまりに対してもそれ自体の正しさを問うたり、社会規範の相対性の面に関心が向かう	**【自己同一性vs自己同一性拡散】** • 自己同一性の確立 • 特定の友人との深い人間関係の形成 • 異性との望ましい関係の学習 • 社会的に責任のある行動の遂行

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

乳児期（０～１歳半）の発達段階の目安

発達課題	**【信頼感vs不信感】** • アタッチメント（愛着）の形成 • 人に対する基本的信頼感の形成
身体的発達	• 首がすわる(3か月ごろ) • ひとりで座ることができる（7か月ごろ） • 自力で立って歩けるようになる（1歳2,3か月ごろ）
認知・知覚の発達	• 視覚における奥行き知覚が可能になる（2,3か月ごろ） • 目の前のものに手を伸ばすようになる（4か月ごろ） • 目標を設定し、それを達成するための手段を講じるといった意図的行動が現れる（8か月ごろ）（例えばベビーベッド上のモビールを動かすためにベビーベッドの柵を揺らすなど） • 対象の永続性（触ることができず、視界に入らなくなったものでも存在し続けているという概念）の理解に達する（1歳半ごろ）
情緒的発達	• 快/不快、他者への親しみ等基本的な情緒を表出する
社会性の発達	• 親しい人とそうでない人を区別し、態度を変えるようになる（6か月ごろ） • 共同注意（他者が指さしたものや見ているものを一緒に見る）が始まる（6か月ごろ） • 喃語が出現する（6,7か月ごろ） • 社会的参照（知らない対象について周囲の親しい成人がどういう表情で接しているかを見て、その対象に近づいていいのか、避けた方がいいのか判断する）が発達する（10か月以降） • 初語が出現する（1歳ごろ）

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

幼児期（１歳半~6歳）の発達段階の目安

発達課題	**【自立vs恥・疑惑】【自主性vs罪の意識】** • 自己主張・自己抑制機能・欲求不満耐性の獲得 • 十分な自己の発揮と他者の受容（他社の感情や意図の理解）による自尊感情・自己効力感の獲得 • 身辺自立への訓練・学習 • 善悪の区別についての学習と良心の芽生え
身体的発達	• ボールを蹴ったり投げたりすることや、その場でジャンプしたり幅跳び運動もできるようになる(2～3歳ごろ) • 片足飛び、片足立ちができるようになる（3歳半～4歳半ごろ） • 人物画をかいたり、丸の模写ができるようになる（3歳半～4歳半ごろ） • 跳ね返ってきたボールをつかんだり、片足で立てる時間も長くなってくる（4歳半以降） • 少し複雑な人物画を描いたり、四角の模写もできるようになる（4歳半以降）
認知・知覚の発達	【自己の知覚】 • 自分と他者の名前の区別がつく（1歳5か月ごろ） • 物の所有に関して「自分のもの」と言って他者に主張するようになる（1歳半ごろ） • 自分のことを愛称や名前で呼ぶようになる（1歳8か月ごろ） • 「熱い」「痛い」等の感覚語が現れる（2歳ごろ） • 鏡に映った自分を自分自身と認識する（2歳ごろ） • ビデオ等映像に映った自分を自分自身と認識する（4歳ごろ） • 自分と他人の区別がはっきりしてくる（4歳ごろ） • 感情語（嬉しい、楽しい等）、認知語（思う、覚える等）が現れる（3,4歳ごろ） • 自伝的記憶が発達する（4歳ごろ） • 1人称の使い分けが見られるようになる（5歳以降） 【自己の認識】 • 「ひとりでやりたい」という意欲が高まりイヤイヤ期（第1反抗期）が始まる（1歳半ごろ） • 自分の性別を識別（性別知覚・自認）し始める（2,3歳ごろ） • 性の安定性（例えば女は女であり続け、お父さんにはなれないこと）がわかる(4,5歳ごろ) • 性の一貫性（表面的な恰好や行動では性は変わらないこと）がわかる（5～7歳ごろ）

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

幼児期（１歳半~6歳）の発達段階の目安

情緒的発達	• 自尊感情が芽生え始め、例えば身の回りのことを自分でしようとし始める • 保育者の期待や要求に敏感になり、それらを自己の行為の指針として取り入れ始める（3歳後半） • 自分の考えていることを相手がどう考えているかを考えながら行動することが出来るようになってくる（5歳ごろ） • 自分の意見や欲求を他者に伝える自己主張・実現機能が5歳ごろまで急激に伸びる • 自己抑制機能が3～7歳まで一貫して伸び続ける
社会性の発達	• 語彙数が爆発的に増える（1歳後半） • イントネーションを下げずに単語を一続きに発するような二語発話が始まり、助詞も使用し始める(2歳ごろ) • 一人遊びや並行遊びを行う（幼児期前半） • 連合遊び、共同あそび、ごっご遊びが見られるようになる（幼児期後半） • 相手の発話の7,8割に対し応答し、比較的長いやり取りが増える（6歳ごろ）

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

児童期（6歳～12歳）の発達段階の目安

発達課題	**【勤勉vs劣等感】** • 集団生活への適応 • 善悪判断に関する基本的な尺度・枠組みの確立 • 抽象的な思考様式への適応、他者の視点への理解力の発達（9歳の壁） • 活動能力の広がりに応じた現実世界への好奇心 • 対人関係能力、社会的知識・技能の向上 • 良心・道徳性・価値判断の尺度の高次化・強化
身体的発達	• 筋力、協調運動、体力が次第に増加し、複雑な運動を行う能力が向上する
認知･知覚の発達	【認知能力】 • 量や数の保存について理解し、外見等の知覚上の変化に惑わされることなく、論理的な操作や思考ができるようになる（おはじきの数は同じだが、おはじき同士の間隔が広くとられて並べられているものと、おはじき同士の間隔が狭くとられて並べられているものを見て前者の方が数が多いと答えることがなくなる）（7～11歳） • 「「Aさんが〇〇と思っている」とBさんが思っている」というった入れ子構造的な推測ができるようになる（9,10歳ごろ） • メタ認知（自己の認知活動に対する認知や知識のこと。）能力が発達する • 抽象的かつ論理的な思考が発達する（11歳～15歳） 【自己概念の発達】 • 5～7歳：自己を性別や容姿など外部的な属性において捉え、心理的特性への意識が低い • 8～10歳：外部的な属性だけでなく、感情や態度などの心理的な他者との違いを受け入れようとする • 10～12歳：多面的な自己についての把握が可能になるとともに、他者と自分を比較することで自己に対して否定的な見方をする一方、他者への同調や同一視が強まる 【性役割】 • それぞれの性別に沿って社会的に期待されている性役割を意識し、取り込もうとする

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

児童期（6歳~12歳）の発達段階の目安

情緒的発達	• 他者の心を推測できるようになる • 大人に対する道徳的・能力的・人間的な対抗的自立心が芽生える
社会性の発達	【仲間関係】 • 仲間関係を重視するようになり、ギャング集団を形成する • ギャング集団ではリーダー、フォロワーの構造が明確で、成員だけに通用する約束、ルールが形成される • 仲間以外の集団に対して閉鎖的、排他的、攻撃的な態度を示すことがある 【友人関係】 • 低学年：自己中心性が強く、相手の立場が分からないためケンカになることが多い • 中学年：友人と協力して活動できることで、親密な友人関係が形成される。自己主張する機会が増えるため、活動の妨害や名誉を棄損されたことが原因となってケンカが生じやすくなる。女子は男子に比べて自分のことを友人に多く話すようになる • 高学年：友人関係においても人格や共感できることが重視される 【道徳性】 • 他者を喜ばせることはよいことであり、他者を悲しませることはよいことではないといった、行為の底にある意図に目を向けるようになる。 • 正しいか間違っているかは家族や友人によってではなく、社会によって定められていると認識しはじめる。ルールは秩序を維持するために定められたものであるから特別な場合を除いて従わなければならないと認識し始める。 【向社会的行動】 • 他者の感情に共感する能力を獲得する

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

青年期（12歳~20歳）の発達段階の目安

発達課題	**【自己同一性vs自己同一性拡散】** **• 自己同一性の確立** **• 特定の友人との深い人間関係の形成** **• 異性との望ましい関係の学習** **• 社会的に責任のある行動の遂行**
身体的発達	• 第2次性徴が開始し、身体の急激な成長、性的な成熟、男女差の増大が起きる • 男性は声変わり、筋肉量の増加、ひげが生えるなどの変化が生じる • 女性は乳腺の発達、皮下脂肪の増加、初潮の開始が見られる • 急激な身体の変化を受け止める段階で、戸惑いや恥ずかしさ、嫌悪を感じ心理的に不安定になることがある
認知・知覚の発達	ー
情緒的発達	• 相手の反応を察知しながら自分の行動を制御するようになる • 感受性が強くなり、自分を取り巻く世界や自分自身に対して鋭敏になり、深い思索を行ったり、鋭い内省を試みたりするようになる • 友人との喜怒哀楽の感情を伴う経験を通じて人間関係を学ぶ
社会性の発達	• 第2反抗期が開始し、親からの精神的自立へ向かう動きが見られる • 家族以外への人間関係の拡大や社会生活の開始も相まって青年期後期以降、新たな互換性を持った親子関係を築くようになる。 • チャムシップと呼ばれる、少数の友人と親密な関係を築く。 • 児童期には自分と非常に類似した者を友人として求めていたのに対して、青年期には自分と非常に異なる者を求めるようになる

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

子どもの仲間関係

幼児期の仲間関係の発達・変遷

3歳ごろ

- 仲間の行動や存在に関心を持つようになり、3歳後半には仲間を誘ったり、おもちゃを共有したり交代で使うようになります。

4歳ごろ

- 仲間との協同遊びに参加しはじめ、ごっこ遊びのような役割を分担し合う社会的な協同が可能になります。遊びも男女別に分かれていきます。

５歳ごろ

- 気の合う同性の仲間との活動が中心となり、遊びの内容を男女により大きく異なってきます。しかし同時に、クラス意識のような集団意識も持つようになってきます。

社会的な地位の違いの表出

- 仲間との相互作用が進む中で、幼児は仲間一人ひとりの違いに気づくようになり、これが同時に仲間の中で好まれる子、嫌われる子、存在感がなく何かと無視される子といった社会的な地位の違いを生みます。

「友人関係」の表出

- 友人関係が生まれます。
- 初期には物理的に近い（家が近い、通園が一緒）ことや、魅力的なものの所有（面白いおもちゃを持っている）といったことから生まれますが、次第に一緒に遊んでいて楽しい子、自分と気の合う子が「友達」になっていきます。4歳ごろにはつねに行動をともにする「友達」を持ち始めることが報告されています。

児童期の仲間関係の発達・変遷

児童期における仲間の重要性

- 児童における仲間関係（特に学校での仲間関係）は、社会的な行動の学習の場であり、心理的な安定を得られる場となっています。
- 仲間に受け入れられている感覚を持てることで子どもは安心して学校での学びに向かうことができます。
- 一方で、仲間からの拒否や孤立は、子どもの情緒的・社会的発達や精神的健康に影響します。

児童期における仲間関係の特徴

- 低学年では幼児と同様に物理的近さや遊びの関心の共通性が仲間関係をもたらします。
- 小学校中学年から高学年になると、次第に親との関係よりも仲間関係が優位となり、同じ遊びを一緒にする者との一体感を持った、3～8名程度の主に同性から構成される仲間集団（ギャング・グループ）が形成されます。
- ギャング・グループはメンバー以外には閉鎖的で、秘密基地を作ったり、仲間だけに通じる暗号を使ったりしますが、この閉鎖性や秘密は、仲間への親密性を高め、親から離れることへの不安を補う機能を持ちます。
- またこの親密性の中で、子どもたちは約束の重要性や仲間への忠誠など、仲間文化や社会的ルール、行動様式を身に付けていきます。

（参考）中澤潤 編「よくわかる教育心理学」,ミネルヴァ書房.2008,pp122-123
（参考）荻野美佐子「発達心理学特論」, 一般財団法人放送大学教育振興会.2015,p216

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

子どもの仲間関係

青年期の仲間関係の発達・変遷

親から仲間へ

- 青年期は心身の変化や親からの自立が進みますが、それまで依存できていた親から自立し離れることには不安や恐れが伴うため、青年は親の代わりとして依存できる、自己の悩みや考えを語り合う同世代の仲間を必要とします。

友人との付き合い方

- 中学生・高校生・大学生と年齢が上がるにつれて、「浅く広くかかわる付き合い方」が少なくなり、「深く狭くかかわる付き合い方」が多くなります。」
- また、外観や行動が仲間と同じであることを重視した友人関係から、自己意識が高まるにつれ仲間と同じであるよりも互いの違いを尊重する関係へと変化していきます。
- 男子では同一の活動を行うことを重視する関係（共有活動）から、互いの相違点を理解し尊重し合う関係（相互理解活動）へと変化していきます。
- 女子では友人との類似性を重視した親密な関係（親密確認活動）から他者を入れない絆をつくる閉鎖的な関係（閉鎖的活動）へ、さらに互いの相違を理解し尊重し合う関係（相互理解活動）へと変化していきます。
- この時期に仲間関係をもてないことは大きな孤立感・挫折感を引き起こし、自尊心の低下をもたらします。

青年期の友人関係の意義

1. 友人に自分の悩みを聞いてもらい、悩みや不安を抱えているのは自分だけではないと分かることで、緊張感をやわらげ安心する。
2. 友人関係の中で自分の長所や短所に気づき、自己内省を通じて自分を客観的に見つめられるようになる。
3. 友人との喜怒哀楽の感情をともなう体験を通じて、人間関係を学ぶ。

小学校高学年から中学校における仲間関係にある危うさ

- 小学校後半から形成されるギャンググループ、中学校の時期に形成されるチャムグループ（同じ興味、考え、活動、言葉が共有されるグループ）では、友達に合わせることへの圧力が著しく高くなります。
- したがって、万引きや喫煙などの反社会的行動が仲間からの圧力の中で黙認されたり評価されたりします。
- また集団への服従を強化するために仲間からの排除やいじめが行われ、小学校高学年から中学生に欠けていじめが増加する背景の一つに、このような心性があります。
- 近年子どもはギャング・グループを経験する機会が失われ、そのため、行動を通した集団の一体感を十分味わうことがなく、そのような子どもたちにとっては、チャムグループにおけるいじめや排斥による一体感の確認が大きな影響を果たしています。

（参考）中澤潤 編「よくわかる教育心理学」,ミネルヴァ書房.2008,pp124-125
（参考）荻野美佐子「発達心理学特論」, 一般財団法人放送大学教育振興会.2015,pp237-238

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

子どもの性意識と性の受容

幼児期

性同一性の感覚の芽生え

- 【3か月ごろ】他者の性別についての知覚ができる
- 【２～3歳ごろ】自分の性別についての識別（性別知覚・性自認）をする
- 【３～4歳ごろ】自分が男なのか、女なのかが分かる（性の同一視）
- 【４～５歳ごろ】女は女であり続け、お父さんにはなれないこと（性の安定性）を理解する
- 【5～7歳ごろ】ズボンをはいても女の子であるというように、表面的な恰好や行動では性は変わらないこと（性の一貫性）を理解する
  ※上記まで「性＝身体的な性である」
- 幼児期後半になると、性を基準にした服装、持ち物、色などに強く固執する姿がしばしばみられる。
- 身体的な性別や周囲が認める性別と性自認が一致しない性別違和がある人の中には、より早くから自分の生物学的な性に対して違和感や疑問を持つこともあります。

性自認	• 一般的に「心の性」と言われます。 • 自分は女性、男性とはっきり認識している人もいれば、どちらでもある、中間である、どちらでもない、わからない、決めたくない等様々な人がいます。
身体的な性	• 基本的に身体的特徴を基にした性別を指しますが、疾患等で「女性/男性」と二分できないこともあります。
性的指向	• 恋愛感情や性的関心がどのような対象に向いているか/いないかを指します。 • 異性愛/同性愛/両性愛/無性愛/全性愛などがある
性表現	• 服装や立ち振る舞い等、外部に向けての性をどのように表現しているかを指します。

児童期

性役割の意識

- 児童期になると、それぞれの性別に沿って社会的に期待されている性役割を意識し、積極的に取り込もうとします。
- 服装や髪型などの外観特性や、遊び、玩具などの興味や好みだけでなく、活動や能力の側面、行動傾向、性格、価値観などの点で男女の違いが大きくなります。
- 性役割形成に関しては、養育者や同輩集団の言動に加えて、教師等ほかの大人の対応や本やテレビ、アニメなどのコンテンツが強力な社会化の担い手となります。

青年期

第2次性徴

- 青年期（思春期）になると第2次性徴が現れ、男性は男性らしく、女性は女性らしくなっていきます。女子の方が男子より早く第2次性徴は現れます。
- 第2次性徴による身体の変化は急激で、児童期までの安定していた自己身体像を崩すものであることから、精神的な動揺を
- 引き起こすとともに、性ホルモンの分泌に伴いわずかなことで感情の変化が起こりやすくなります。
- 最近では体格の成長や性成熟が早まる「発達加速現象」も見られ、身体的発達と知的・心理的発達の間にアンバランスが生じ、早期の性行動などを生み出しているケースもあるようです

（参考）中澤潤 編「よくわかる教育心理学」,ミネルヴァ書房.2008,pp126-127
（参考）向田久美子「新訂発達心理学概論」,一般財団法人放送大学教育振興会.2018,p103,pp131-134,145-147

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

道徳性と向社会的行動

道徳性

- 子どもが行動の善し悪しをどのような基準によって判断するのかを道徳的判断と呼びます。
- コールバーグは、ハインツのジレンマ（ハインツの妻はがんで死にそうだが、彼の住む街にはその病気を治す高額な薬がある薬屋がある。ハインツはその薬の購入代金の半分をためたが、やむなく薬屋からその薬を盗んだ。ハインツの行動は是か否か）という課題で道徳判断が以下のような段階で発達的に変化していくことを示しました。
- 幼児期では第１～2段階、児童期では第3～4段階に到達すると言われます

段階	
	＜水準１　前慣習の水準＞ 行為の善し悪しは、行動がもたらした罰や報酬といった結果による
1	**罰と服従への志向**：罰を受けないことに価値がある
2	**手段的欲求充足論**：自分にとって得になるかどうか
	＜水準2 慣習の水準＞ 行為の善し悪しは、他人からどう思われるかにより判断
3	**対人同調**：多くの人が当然だと思う行動かどうか
4	**法と秩序志向**：規則や社会秩序の維持から判断
	＜水準3 脱慣習の水準＞ 行為の善し悪しは、普遍的な道徳的価値や原理により判断
5	**社会契約志向**：法は擁護するが、それよりも重要な物（人間の生命、権利など）を優先して判断
6	**普遍的な倫理原理志向**：正義、平等、個の尊厳といった原理原則と法の規定を比較衡量して判断

向社会的行動

- 他者を慰める行動、援助行動、分与行動といった、他者の利益となることを意図してなされる自発的な行動を「向社会的行動」といいます。
- 児童期では友人同士助け合おうとする行動が増え、苦痛を感じている他者に対してより積極的に関わるようになります。
- 援助行動や分与行動は小学校中学年ころまで増加し、高学年以降減少し、高校生になると再び増加します。
- 児童期後半から青年期にかけては、目の前に存在しない他者にも共感する能力が増すため、自分が経験していない苦痛にも共感し、向社会的行動を示すことができるようになります。
- 向社会的行動ができるようになるためには、道徳的構造の内在化（共感、道徳原理、行動規範、善悪の感覚、違背の感覚、他者を傷つけたり助けたりする行為のイメージとそれと結びついた自己避難や罪悪感の総体）が必要です。
- 道徳的構造の内在化において、誘導的方法（犠牲者の視点に立ち、どの子の気持ちを示す。「あの子は自分の作った塔を自慢していたのにあなたが壊してがっかりしているよ」）によるしつけが有効とされています。
- 誘導的なしつけは、子どもに犠牲者の苦痛に注目させ、それによって同情的苦痛を引き起こし、またその子どもが同情的苦痛の原因となっていることを示し罪悪感を作り出します。加えて大人が向社会的行動のモデルとなることで行動規範、善悪の感覚を伝えていくことで、道徳的構造内在化を進めます。

（参考）中澤潤 編「よくわかる教育心理学」,ミネルヴァ書房.2008,pp130-131
（参考）向田久美子「新訂発達心理学概論」,一般財団法人放送大学教育振興会.2018, pp136-141

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

参考文献

- 向田久美子：新訂発達心理学概論.一般財団法人放送大学教育振興会.2018
- 中澤潤 編：よくわかる教育心理学. ミネルヴァ書房. 2008
- 荻野美佐子：発達心理学特論. 一般財団法人放送大学教育振興会. 2015

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.